「公共知識人」論とミルズ社会学――ジャコビーの所説を手がかりとして――

伊奈正人[1]

論旨

本報告は、ジャコビーの所説を手がかりに、40年代のテキストを中心として、ミルズの公共知識人論を検討し、アメリカ社会学史の中への位置づけを試みることを課題とする。

ジャコビーの公共知識人論は、知識人の中間階級化、知の制度化のなかで、思想内容の如何を問わず、かつては独立した存在感を誇っていた知識人が不可視化されてゆく様を描いた（「みえない知識人」論）。ジャコビーが不可視とした知識人は、制度化した公共知識人だけではなく、――ニューレフトやポピュラー文化などの――未開発の知識人も包括するものである。後者が生み出す知を知識人的なものから除外する――あるいは「みえないもの」として一括する――ハイブラウな意志が、「最後の知識人」＝ニューヨーク公共知識人の批評性、作品性を生み出している。それは、新大陸のハイブリッドな国民国家アメリカに根ざしたヴァナキュラーなことばで、批評の根問いつづける作業だった。

ウェーバーとヴェブレンから学んだミルズの社会批評は、同様の批評的作品性をたたえつつ、職人性概念を根幹にすえ、未開発の公共知識人、公衆を見据える視点を兼備していた。それは、19世紀ヨーロッパが対峙した工業化と科学技術、産業社会と合理化、新中間階級と大衆の問題と対峙し、人々の生活実感などを手がかりにしながら、公衆の条件＝未開発の社会資源論理化の意匠を探求したアメリカ社会学――シカゴ学派、パーソンズ、ベル等――に共通する作品性であるとも言える。

ミルズにおける公共知識人論、公衆論というと、晩年の『パワーエリート』の大衆論、『社会学的想像力』の知的職人論、あるいは「ニューレフトへの手紙」などと関連して論じられる傾向がある。しかし、学問的知や科学技術と日常的生活をシームレスに読み解くミルズの知識社会学に照らしながら、『新しい権力者』における政治的公衆論、最初期の知識人論などを読み解くことで、ミルズの公共知識人論、公衆論の骨子は論定可能である。公共知識人という観点からすると、後期の諸作品よりも、公衆形成の論理を探求したこの時期の論考こそが重要、とすら言える。ミルズ研究の観点から見れば、こうした論定は、公共知識人論（知識人論と公衆論）をピボットとして、大衆論と知識社会学を整合的に解釈する試みである。

1. はじめに

「公共知識人」論や公共社会学についてアメリカ社会学史との関わりで論じるという主題をいただき、清水2011、堀2000、本間1996などを主要な手がかりにしながら、にわか勉強ではあるが、文献をサーベイし、公共社会学について整理した。そして、報告者がここ数年行ってきたミルズの学説研究、かつて行ったアメリカ知識人研究などと照らし合わせながら、報告原稿をまとめた。

報告の前半は、公共知識人論、公共社会学という問題をミルズ研究という観点から受けとめ直したあと、公共知識人を用語として確定したとされるR.ジャコビーの『最後の知識人』を検討する（2、3）。報告の後半は、40年代に書かれた知識社会学、公衆論とかかわるミルズの論考を、ジャコビーの知見に照らして検討し、アメリカ社会学史に位置づけ直すことを試みる（4、5、6）。

2. 公共社会学をめぐる若干の不都合――M.ビュラウォイの問題提起とミルズ研究

［論旨］：ビュラウォイは、ミルズを公共社会学者として高く評価する。しかし、公共社会学の分析的実質が論定できぬのなら、旧来のミルズ像（＝問題提起は誠実だが学的実質をのない、いささか残念な社会学者）が再確認されるだけである。理論的な評価も高い知識社会学、とりわけ動機論と初期ミルズの知識人論、公衆論の検討で、公共知識人論に対するミルズの実質的貢献について社会学史的に検討する。公共知識人概念を最初に用語化したジャコビーの議論を手がかりに検討のポイントを整理する。

「公共知識人」論という本企画の主題――それはコーディネーター清水晋作（敬称略、以下同様）の新著（清水2011）主題でもあるが――は、M.ビュラウォイのアメリカ社会学会会長講演[2]をモチー

---

[1] 東京女子大学現代教養学部国際社会学科社会学専攻 email: inainaba@lab.twcu.ac.jp

[2] ビュラウォイの知見については、A.トゥレーヌ、I. ウォーラスティンなども議論に加わっているClawson et.als 2007のバージョンを参照した。Agger2000はビュラウォイの講演に先んじて、公共社会学について論じている。アジャーは

フとするものであるという。講演では、アカデミズムの枠にとどまらず広く公衆に語りかけ、社会への反省を促す問題提起を続けた公共社会学者の一人として、C.W.ミルズにも言及がなされた。さらに、ビュラウォイの問題提起をきっかけとした公共社会学、公共知識人をめぐる論争[3]のなかでも、しばしばミルズは言及されている。

こうした一種の「活況」は、ミルズ研究にとり、歓迎すべきことなのだろうか。死の直後より（Horowitz1964:19）、ミルズは、代表的な公共社会学者の一人として語られてきた。しかし、その一方で、その限界を代表する存在としても、ミルズは不動の位置を占めているとも言える。ミルズに限らず、ラディカル社会学や批判社会学など、公共社会学の諸潮流については、かねてより分析的理論モデルや実証的応用研究の不在などが批判されてきた。ビュラウォイも、これを自覚し、応分の対策を施し、公共社会学を提起している。しかし、十分な反批判がなされたとは言いがたい。

今日では、自己反省論、リスク論、価値規範論、歴史社会学などが重要な視点として提起され、資源開発的発想の是非なども含んだ、分析的な議論が積み重ねられている。[4] かつて素朴な価値中立論を批判していた批判的な社会科学が、逆に分析的な価値規範論の欠落を批判されることすらある。[5] ミルズ研究にとって問題なのは、こうした陳腐さがすべてミルズに帰責され、陳腐の象徴としてのミルズ像が固定化されることである。

もっとも、周知のように、構築主義、感情社会学、言語派社会学などの現代社会学理論において、ミルズの分析的な知見は、それなりの評価がなされている。その場合、評価は初期の知識社会学的知見に限定され、公共社会学的な部分は、評価の対象から除外される。逆に、公共社会学的な論脈においては、知識社会学的な知見はあまり言及されない。

報告者は、修士論文以来、ミルズに一貫する視点の論定に腐心してきた。この四半世紀の間に、テキサス大学に書簡や草稿などの史料が整えられ、ここ数年は毎年のようにミルズ研究が公刊されている。[6]そして、知識社会学と大衆社会論の断絶を埋める事実も多数発見されるに至っている。こうした研究を踏まえながら、ミルズに一貫する分析的な視点としての公共社会学、公共知識人について論じることもようやく可能になったのではないか、と報告者は考えている。

報告者は、5 年前の矢澤修次郎退官記念論集に投稿（伊奈 2006）して以来、ミルズと K.バークとの関係に注目し、初期の知識社会学理論（とりわけ動機づけの社会学）を作品性のモチーフ論として読みかえる作業、ミルズに一貫する批評性、社会学的批評の視点としての動機論を抽出する作業を重ねてきた（伊奈 2010a、2010b など）。これを公共社会学に照らして検討することも不可能ではない。しかし、本日与えられた主題はアメリカ社会学史という観点からの検討である。そこで、本報告では、知識社会学研究を踏まえつつも、公共知識人論のアメリカ的文脈、それとアメリカ社会学史の関わり、そしてそのなかでのミルズの知識人論、公衆論の位置等について考察することを試みたい。

3. アメリカにおける公共知識人論——ジャコビーの『最後の知識人』の検討

［論旨］：ジャコビーが見すえているのは、アメリカ公共知識人の制度化、新中間階級化＝サラリーマン化というプロセスである。制度化とはまた、経済的、民族的、人種的、ジェンダー的などのマイノリティが高等教育に動員、登用されるプロセスでもある。そのなかで、アメリカというハイブリッドな文化表象について問いかけた知識人たちは、公衆に根ざしたことばで語り、ハイブラウな識見に

、盛山2007の説明によれば、「脱構築系」と形容される。公共性の臨界をめぐる議論など興味深い論点を扱っているようであるし、またミルズへの言及も多数ある。しかし、批評用語・思想用語を多用する行論は、本報告の論旨とはずれる面があるので、検討の対象からは外した。

[3] 講演の反響については、盛山2006が次のように説明している。「*The British Journal of Sociology* 誌 が2005年 の Vol.56(issue 3) で特集 を組み,ベック,カルホーン,エチオー二な どがコメント論文を寄せているし、*Critical Sociology* 誌 も2005年のVol.31 (issue 3) で特集し,そこにはビュラウォイ自身の新しい論文のほか,アッカーやアロノビッツなどの階級研究者 たちがコメント論文を寄せている」。

[4] 盛山2007、瀧川2008らの批判もこの点を問題にしていると言えるだろう。

[5] 先日の日本社会学会でも貧困問題ととり組む都市社会学者が、功利主義法哲学者に、規範論の不在を批判された。

[6] 伊奈の論考は文献表参照。ミルズ研究としては、3巻本のミルズ論選集Aronowitz2004（同編者はミルズ論を近刊の予定）、一次史料を駆使した本格的な政治思想史研究Geary2009、ガースとミルズの関係について明らかにしたOakes & Vidich1999、批評や文体と言った側面に注目したSummers2007, 2008、ラテンアメリカとの関わりに詳しいTrevino2011などが特筆される。

よって、商業文化との「線引き」を行う批評性を一定時期うちだすことができた。しかし、やがて商業文化、メディア文化の変容により知識人は公衆や批評性、そして独立した存在感を喪失した「みえない知識人」と化す。

こうした公共知識人のなかで、社会学者たちは、文芸的な批評性を共有しつつも、新中間階級の日常的生活やマイノリティの動員プロセスと対峙することを課題とした点で、アメリカ公共知識人の中で特異な存在であった。社会学者たちは、商業化される日常生活に根ざしたアメリカ的な生の論理を探求した。

アメリカ社会学史的にミルズの公共知識人論を検討する場合、検討すべき問題は次の２つである。１）中間階級化と知識人および公衆のアイデンティティという問題。２）商業化と新しい作品性、批評性という問題。

3.1. 公共知識人と「見えない知識人」——ハイブリッドなアメリカ像と知の制度化

次に論をアメリカ社会に限定して、公共知識人という用語について、検討を行う。その前に、まず知識人それ自体の概念にも一言しておく。アメリカ知識人論との関わりにおいて、知識人概念について整理した論者としては、D.ベル（Bell1980）、I.ハウ(Howe1968)、馬場修一(馬場 1972)、矢澤修次郎（矢澤 1996）、堀邦雄（堀 2000）、秋元秀紀（秋元 2001）らがいる。これらの議論を総合すると、アメリカ知識人の存在は、次の 3 点に要約されるように思う。ロシアのインテリゲンチアにみられるような高踏的、貴族主義的、批判的な視点を持つ存在。しかし、他方で、ラディカルな社会運動とも連携し、社会との結びつきを、批評というスタイルで確立しようとした存在。そして、アメリカ社会の変貌の中で、ポピュリズムや「技術者の政治」という問題と対峙する存在。[7]

こうしたアメリカ知識人の存在を、公共知識人（public intellectural）ということばで最初に用語化したのが、R.ジャコビー『最後の知識人』（Jacoby1987）である。[8] ジャコビーの著作は、広く公衆に語りかける知識人が、大学という高等教育機関によって制度化され、ホワイトカラー化してゆく文脈を考察したもの、として知られている。狭い枠にこだわることなく、顕著な批評性、批判性を提示した知識人、——旧世代の知に対して新しい知のありようを突きつけるような「次世代」——が「見えなく」なっていることを指摘し、こうした「見えない知識人」との対比において、公共知識人の概念を提起している。

ジャコビーは、生まれた年によりアメリカの知識人を 3 つの世代に分けている。第 1 世代は、1900 年前後に生まれた知識人で L.マンフォード、D.マクドナルド、E.ウィルソンらの名前が挙げられている。第 2 世代は 1920 年前後に生まれた人びとで、A.ケイジン、D.ベル、I.ハウらが名指されている。この二つの世代が、公共知識人とされる。そして、第 3 世代は 1940 年以降に生まれた「見えない知識人」である。(Jacoby1987, p.17)

第 1 世代は、ジャーナリズムの世界で活動するフリーランサーで、大学で教えることがほとんどなかった人びとである。第 2 世代は大学に籍を置きつつも、精力的に評論活動を展開したいわゆるニューヨーク知識人である。この世代が「最後の知識人」ということになる。そして、第 3 世代は、大学で教える「サラリーマン知識人」たちである。学籍による世代区分は、知識人の制度化、知の制度化という論点を提起したものである。「見えない知識人」たちは、ニューレフトの運動、ポストモダンの胎動といった趨勢をになった。その一方で、制度化が盤石のものになっていっている逆説を、ジャコビーは皮肉に見据えている。[9]

---

[7] 馬場修一は技術的知識人の概念を提起した。イギリスの知識人階級について検討を行った尾上正人2001は、中間階級としての知識人という論点を提起した。

[8] ビュラウォイも講演でジャコビーを引用し、書名をもじって「最後の社会学者」といった言い回しを用いている。ジャコビーは、2000年の改訂版の序文で「管見の限りにおいては、この語を最初に用語化したのは自分である」（Jacoby1987→2000, p.xvi）といっている。

[9] もちろんこうした世代区分は理念型的なものであり、知識人のありようを明解に区分するものではない。K.マットソンは次のように言っている。「「公共知識人」という用語は、ジャコビーの『最後の知識人』によって知られるようになった。ジャコビーの議論は、論争的で学術性を欠いているとの指摘もある。しかし、ニューレフトがアカデミックになっていくという説は、本書の歴史研究でも明らかになっている。ジャコビーが、公共知識人として評価している人々も象牙の塔に逃げ込んでいるわけだが」（Mattson 2002, p.236 nb.6）。

知識人の制度化という過程は、貧困層、人種的・民族的マイノリティ、女性などが、大学に定位される過程である。こうしたハイブリッド化をとおして、「アメリカ」という文化表象がアイデンティファイされてゆくことに、ジャコビーは注目している。第 1 世代においては、「アメリカ的なもの」よりもヨーロッパ的なものへの傾倒がむしろ確認される。第 2 世代が、「アメリカ的なもの」をアイデンティファイしてゆく。

こうした世代交代において、特筆されるべきは、大学での職を多数得るようになったユダヤ系知識人である。第 1 世代から第 2 世代への世代交代は、非ユダヤ系知識人からユダヤ系知識人への世代交代として特徴付けることもできる。もちろん、第 2 世代にも非ユダヤ系知識人はいるが、「アメリカ的なもの」をになったのはユダヤ系知識人である。ユダヤ系知識人は、アメリカというハイブリッドなアイデンティティを、アメリカ的な伝統によって同定する。ユダヤ系知識人は、くり返し「アメリカ的なもの」を問いかけた（Jacoby1987, p.90）。[10]

3. 2. ヴァナキュラーな批評とテクニカルな批評——知識人と公衆のことばをめぐって

ジャコビーは、「アメリカ的なもの」に対してラディカルな問題提起を行った知識人は、非ユダヤ系の人びとが多く、ユダヤ系が少ないことにも言及している。第 1 世代では L.トリリングと D.マクドナルド、第 2 世代では D.ベルとミルズ、第 3 世代では N.ポドレッツと M.ハリントンが好対照である、とジャコビーは言う（Jacoby1987, p.88）。[11] ジャコビーの考察のポイントは、移民の子孫たちが、制度化の進行と平行して、「生まれた土地の上で」（ケイジン）アメリカ社会に「根ざす」ことを自問自答した、という点にある。問いかけの方向性がどうあれ、新大陸に創られた国家において「アメリカ的なもの」が省察されたことに変わりはない。

ジャコビーは、随所で「根ざすこと」（vernacular）について議論しており、それが公共知識人考察の鍵の 1 つになっているとも言える。公衆に「根ざしている」ことは、公共知識人の重要な側面であり（Jacoby1987, p.x）、専門職化（professionalization）により公衆に「根ざした」知識人が「見えなく」なりつつあることは 1 つの脅威である（Jacoby1987, p.xv）、とジャコビーは言う。そして、公共知識人が公衆に「根ざしている」ということは、語りかけることばを持っているということである。

ジャコビーは、再三ガリレオに言及している。ガリレオが問題視された理由は、主張内容もさることながら、イタリア語で公衆に向けて語ったことにある、とジャコビーは言う（Jacoby1987, p.235）。すなわち、公共知識人とは、ラテン語、学術用語、思想用語・批評用語、あるいは「人工言語」に安住するのではなく、公衆に「届くことば」をもっている存在ということになる。第 2 世代までの公共知識人は、そうしたことばを持ち、また語りかけるべき多数の公衆を希求し、発見できた。これに対して、「見えない知識人」たちは、語りかけることばを喪失し、大学内で専門家たちに向かって語るのみである、とジャコビーは言う（Jacoby1987, p.78）。そして、ニューレフト、ポストモダンという思想潮流も、同様のものとして一括りにしている。

堀邦維『ニューヨーク知識人——ユダヤ的知性とアメリカ文化』（堀 2000）は、ニュークリティシズムからポストモダニズムに至る批評を「技術的批評」と括る。そして、そうした批評は、フランス生まれの批判理論の焼き直しであり、矮小化したものにすぎないもので、論者たちは学会内部での党派形成と派閥闘争にあけくれている、と切って捨てている。そして堀は、「一般の読者にとってはほとんど無意味であるばかりか、実際の創作現場ではまったく機能しない」（堀 2000, p.251）と言う。

こうした、「見えない知識人」たちの「技術的批評」に対し、ニューヨーク知識人の批評を堀は高

---

[10] 本間長世は、ユダヤ系知識人で、『生まれた土地の上で』の著者であるケイジンについて、次のように言っている。「ちょうどポピュラーカルチャーの世界でティン・パン・アレーのユダヤ系の作曲家たちが目覚ましい活動をしたように、ハイ・カルチャーの世界でもユダヤ系の学者や知識人たちが台頭し、一方でアメリカ文化の過去を受け入れ、他方でアメリカ文化の国際性を高めたのである。今日ケイジンを読みかえしてみると、現代アメリカの作家たちが、自分の国を各世代ごとに･･･発見し再発見してこなければならず、エマソンの「アメリカの学者」（ヨーロッパに対するアメリカの知性の独立宣言だと言われてきた）を何度も書き直して、それでもなお、いまだかってアメリカを知らなかったかのごとく、「アメリカ！アメリカ！」と叫ばなければならなかったのかという問いが彼の問題意識だったことがよくわかる。そしてケイジンは、「おそらくわれわれは、まだアメリカがわかっていないのだ」と述べている（本間1996、p.178-179）。

[11] この他、E.ウィルソン、G.ヴァイダル、P.スウィジー、J.K.ガルブレイス、C.ラッシュら、非ユダヤ系知識人の名前が添えられている。

く評価し、次のように言っている。「それにひきかえ、ニューヨーク知識人の批評は、文学だけでなく美術などを含めた文化全般において、一種のテイストメーカーとして機能し、創造の現場にまで影響を及ぼしたという点で、学会内の批評の流れとはかなり異なっていたことがわかる」（堀 2000, p.252）。こうした堀の指摘に照らしてみると、知の制度化の過程で、さまざま思想潮流が象牙の塔のなかの矮小な派閥、党派と化し、「見えなく」なっているというジャコビーの指摘もよく理解できる。

3.3. ハイブラウな文化とポピュラー文化の作品性

それでは、人びとに根ざした、新しいボランタリズムにも連なるようなカウンターカルチャーについてはどうだったのか。それは、頭で考えるだけではなく、全身で感じ、表現し、そしてつながりあう文化、生活実感を重んじる文化であったし、それをきっかけにして、人びとは新しい暮らしをはじめ、身近なわかりやすいことばで語りはじめたのではなかったか。[12]

ジャコビーは、カウンターカルチャーの象徴的存在であったビートルズ、B.ディラン、学生運動のリーダーだったT.ヘイドゥン等にも論及している。ジャコビーは、先行研究を引きながら言う。ディランの詩が大学で講じられ、ビートルズの映画が芸術の場で上映されることに将来なったとして、その作品性、批評性は、長く芸術的価値を持ちうるものなのか、と。他方で、ヘイドゥンの社会運動家としての活動を認めつつも、それが知識人といえるかをジャコビーは問う。他のニューレフトの活動家も、同様に大学の教員になったり、あるいは公の場から姿を消したりしている。こうした時代において、知識人とはいったい何なのか、とジャコビーは問いかける（Jacoby1987, p.112-113）。

60年代の若者たちが主張した生活実感のような文化がもつ作品性、批評性は、文学者、文芸批評家によって厳しく批判されてきた。そこでは、意志的な知の能作、芸術の能作の欠落が、常に問題にされる。もちろん、カウンターカルチャーは『パーティザンレビュー』のような雑誌にも一定の影響を及ぼした。1967年の「ビートルズから学ぶ」というR. ポイリアの論考（Poirier1967）は1つの典型である。このような立論自体が、かつては同誌とは無縁のものだった、と堀は言う（堀2000, p.257-258）。実際、この論考が1つのきっかけとなって、F.ラーブが同誌を辞去した。[13]

ラーブは、『パーティザンレビュー』創刊に際して、「ペイルフェイス(palefade)」と「レッドスキン(redskin)」という二分法をもって、雑誌の立場を表明している（Rahv1940他）。堀2000は、この二分法を次のように整理している。前者は、精妙にして荘厳な知的な文学で、メルヴィル、ホーソン、ヘンリー・ジェイムス等によって代表される。後者は、フロンティアと都市生活の現実を描く文学で、ホイットマン、ドライサー、マーク・トウェイン等によって代表される。前者が現実との距離化を行うのに対し、後者は現実と融合する。これは、汎用される、「ハイブラウ」「ロウブラウ」（Brooks 1915）と対応する区分である、と堀は説明している。ラーブは後者に否定的で、前者に知的可能性を見いだしている。（堀2000, p.50-51）。こうした、「ハイブラウ」な視点は、W.リップマン以来、アメリカの批評家に伝統的な視点の1つである。

D.マクドナルドは論文「マスカルトとミッドカルト」で、「ハイカルチャー」「ミッドカルト」「マスカルト」という3分法を提示している（Macdonald1960）。高級文化のみが文化に値するもので、それ以外は文化ではない、という意味において、「カルト」ということばが用いられている。ラーブと同様、高踏的な文化を重視する知見であるが、民俗文化などはとりわけ問題視せず、むしろメディアの発達などにおいて、まがい物の高級文化としての「ミッドカルト」が、広く流通するようになることを批判している。「ハイカルチャーの基準を尊重していると見せかけながら、その実、ハイカルチャーを水で薄め、通俗化してしまう」もの、というのがマクドナルドの「ミッドカルト」の定義である。俗悪な高級文化趣味ばかりでなく、ヘミングウェイの小説なども、「ミッドカルト」として一刀

---

[12] 上野千鶴子は、学生運動のなかで自死した高野悦子『二十歳の原点』と田中美津『いのちの女たちへ』『かけがえのない、大したことのない私』を比較して次のように言っている。「高野悦子と田中美津のテクストのあいだにはわずか1年の違いしかない。だが、この文体の落差は何だろうか。学生運動ジャーゴンという「男言葉」に操だてして自分の生を窒息させたひとりの心よわい女子学生と、そのなかでもがきながら、何としても男言葉にからめとられずに生き抜こうと必死で「女言葉」をかくとくしたリブの元祖のちがい、といえばはなしがつきすぎるだろうか」（上野2000, p.34）。

[13] この例については、堀2000より学んだ。

両断にされている。[14]

ジャコビーが重視しているのは、時代区分のところでも述べた公衆の変容、公衆の喪失であり、その背後にあるメディアの変容である。主要なメディアが、ラジオからテレビへと変化することで、コミュニケーションの様式は一変する。そして、ビートルズやB.ディラン、さらにはあらゆる知識、文化がメディアによって流通し、商業文化が隆盛を極めるに至ったのが 60 年代のアメリカである。[15] 一方、大学が大衆化し、この時期学生数が何倍にも膨れあがったことも、銘記される必要がある。知識人の制度化、知の制度化とは、こうした大衆的な教育としての高等教育、教育産業としての大学の制度化と結びついている。

ジャコビーは、カウンターカルチャー、ニューレフト思想、あるいは直接検討はされていないが、ポストモダン思想の内容について問題にしているわけではない。制度化、商業化、マスメディア化といった変化のなかで、知識人がオーディエンスとしての公衆を喪失し、そして他方で、知識人が中間的な「給料取り」となり、制度の中の地位上昇にのみ腐心する存在、知識人として「見えない」存在になってしまっている逆説を、描出することが、ジャコビーの知識人論の眼目である。

それでは、制度化・商業化された知や文化、そこにおける生活実感を重視する文化、加藤秀俊の言葉を借りれば、「実感主義」的な「中間文化」[16]には、一切の作品性を見いだすことはできないのであろうか。たとえば、W.R.テーラー（Taylor1992）はゴサム＝ニューヨークの商品文化の可能性について検討している。L.レヴァイン（Levine1988）は、ハイブラウとロウブラウの「線引き」が時代時代の社会背景によって可変的であることを歴史的に描き出している。本間長世は、こうした文献なども引用しつつ、商業的文化の作品性について、「パスティッシュの文化」と呼んでいる（本間 1996. 154）。[17] 本間は、論を次のように結んでいる。「エリート層と労働階級の双方にまたがるような観

---

14 生井2005は次のように言っている。「注意すべきは、･･･マクドナルドが徹底した個人主義者であり、かつモダニズム芸術革命の唱道者だったことである。現によく見ると、彼がハイカルチャーとしたものの多くがモダニズムの産物であり、逆に古典主義美術の類いはしばしば嘲弄･･･の的となっているのがわかる」（生井2005, p.255）。

15 多くのサブカルチャーも商業主義と不可分のものであったことは、銘記する必要がある。ロックンロールの名付け親とされるラジオＤＪのアラン・フリードはレコード販売促進の賄賂を受け取った嫌疑がかけられた。ロックコンサートも、ウッドストックなどの奇跡的な例外は別にすれば、その商業主義が問題となった。たとえばウッドストックを上回る規模のワイト島コンサートは、料金を払ったものと払わなかったものがフェンスで仕切られ、多くの若者が暴徒と化した。また、多くのアーティストが、商品生産に疲弊し、アルコールやドラッグでジャンキーになったり、命を失ったりしたことにも留意する必要があるだろう。こうして生産，販売されたロック作品は、世界中に流通した。遠藤薫は、サブカルチャー性、マイナー性が商業性をもち、流通するところに、アメリカ的な商業主義の特徴を見出している。「大戦後の世界では、ヨーロッパに代わってアメリカがもっとも大きな影響力をもつようになる、しかしながら、上流／中流階級の歴史が浅いアメリカでは，深いところから階級の再生産を規定するような，安定した＜趣味＞は存在しない、むしろ，アメリカが、ヨーロッパに対して新たな優位性を誇示しようとするならば、ヨーロッパとは異なるアメリカの正統性の根拠を、『開拓者魂』すなわち周縁の、中心に対する優位性に求めざるをえない、＜趣味＞は，規定の秩序の中にではなく，カオスのエッジにあると規定するのが，アメリカ主義なのである、・・・アメリカ国外の国々の文化もまた，アメリカ的なローカライズを施された上で，グローバルな＜流行＞として再びアメリカから送り出されていくのが、今日の状況なのである。かつての＜流行＞がトリクルダウンするものであるとすれば、今日のそれはトリクルアップするかのように観察される」（遠藤2007 p.p.120-121）。

16 「実感」を重視すること――「生活に根ざした」、「地に足のついた」などという文言を重視する考え方、理論偏重に対する「反知性主義」――が、経験主義の色濃い英米系、とりわけアメリカのプラグマティズムに顕著であることは、よく指摘される。そうした思想を日本に移植して問題提起を行った雑誌に、『思想の科学』がある。加藤秀俊は、同誌や、「京都学派」、そしてアメリカの社会学思想の影響を受けつつ、日本で６０年安保前夜に「実感主義」や「中間文化論」を提起した。岸信介に「長島を見たいからこそ、国会にデモに行く」と反論した現実主義的な「舌鋒」のさえは、桜井哲夫が紹介している（桜井1983）。その加藤が、『中央公論』の対談（橋川文三、江藤淳、田口富久治、大江健三郎）で大江に激烈に反論されていることに注意したい（江藤1958も参照）。バカな社会科学者は、今ごろになって実感に新鮮さを覚えているのかもしれないが、文学者にとっては、実感は自明の出発点だった。文学者は、実感を前提に表現の方法を創出することに、身を削ってきたのだ、と。

17 本間は同所で次のように言っている。「1920年代の終わりまでには、ニューヨークのミッドタウンが基本的に今日と変わらぬ性格を備えるようになった。すなわち、グランド・セントラル駅から出る鉄道線路がすべて地下に入ったことにより、パーク・アヴェニューに沿ってデラックスなアパートメントが立ち並ぶようになり、ロックフェラーセンターを中心としてオフィスビルが集中し、ミッドタウン・ブロードウェイが中産階級の人びとを主たる対象とする劇場街となったのである。そのような新しい景観に見合うかたちで発達したのが、テーラーのいう「パスティッシュ（元来、模造、ごたまぜの文化を指す）の文化」としての精妙な商業文化だった。

客ないし観客層を捉える商業文化を、ニューヨークが生み出したことにも注目すべきであろう」（本間 1996, 156）。知識人の可視性／不可視性、知や文化作品の作家性／匿名性という「線引き」をめぐる問題も、同時に検討される必要があるだろう。[18]

ともあれ、ジャコビーの公共知識人論は、知識人の制度化＝新中間層化を背景としながら、知識人の可視性、公衆への根ざし、作品の批評性などについて、争点を提起するものであったことが確認された。文芸批評に重きをおいた多くの知識人のなかで、D.ベル、D.リースマン、そしてミルズ等社会学者たちは、例外的な存在であったとも言える。批評的なスタイルで、人びとの心理、生活などを考察することが、社会学者独特の課題だったからである。

4. ミルズにおける知識人論と公衆論

［論旨］：２つの問題のうち第１の問題＝中間階級化と知識人の変容、公衆の変容について本節では検討する。ミルズは、知識人の中間階級化＝知の制度化のなかで、多元論の一元化、価値中立という神、そして商業主義を批判し、政治的な公衆の条件、ヴァナキュラーな知の条件を探求した。

4.1. 自由な知的職人と雇われ知識人

さて、以上の議論を踏まえて、ミルズにおける公共知識人の問題について考えてゆこう。検討すべきことは、ジャコビーの公共知識人の定義に照らして、ミルズ社会学に一貫する批評性を検討することである。論証すべきは、ミルズの大衆社会批判、社会学批判が、初期の論考から一貫するもので、かつそれが知識社会学研究、プラグマティズム批判と表裏一体のものであること、が第一。そして、第二に、そうした批評性にジャコビーの言う公共知識人ミルズの特質があるということ、である。

ミルズは博士論文でプラグマティズムの社会学的考察を行うのとほぼ時を同じくして、批評活動を開始している。ここでは、その最初の作品に注目したい。それは、マクドナルドの『ポリティクス』誌に 1943 年に掲載された知識人論「無力な人びと――知識人の社会的役割」である。[19] この論文において、ミルズがこれ以降展開する知識人批判の要点は、ほぼ出し尽くされていると言っても過言ではない。アメリカ的理想――地域ごとの合理的なコミュニティを基礎に自律的な個人が多元的な公、タウンシップを作り出すという「古き良き民主主義」の伝統――が形骸化しているにもかかわらず、知識人が、社会変動の前で無力さを噛みしめつつ、理想の修復に躍起になっている、という終生貫いた知識人論のモチーフが、この論文に縮約されている。

かつては理想の改造という課題に取り組んだプラグマティストへの批判からミルズは論を始めている。

---

18 パーソンズは「見えない知識人」と前提に、公衆の条件を誠実に問いかけたと言いうるのではないか。福田恆存は次のようにいう。「すぐれた芸術は強靭にして俊鋭な境界線をもつ、といったのはブレイクである。この公理を頭において、原始芸術を、ないしはいわゆる「民芸」なるものを眺めてみるがよい。境界線とはたんなる線を意味しているのではない。それは生活との境界線である。特殊児童の絵や民芸は生活の才能であり、生活の悦楽であり、それゆえけっして芸術ではないのである。･･･だが、民芸が芸術に近づく唯一の道がある。都会の有閑階級の応接間を飾り、ようやくかれらの好尚に投じてくるや、素朴な農民たちは過去の遊戯的、あるいは暇潰し的制作の無意識状態から脱し、やや意識的になる。もちろんいかにして素朴の美を発揮するかという問題がかれらを動かすのではない。素朴を強要する浮薄な都会人士の嗜好にいかにして媚びるかという――芸術上のではなく――商業上､生活上の問題がかれらの心に忍びこむのである。ここでかれらは一歩芸術に近づき、同時に無限に芸術から遠ざかるのだ。」（福田 2004:20-21）

19 ミルズは1943年に書いた書簡(Mills to Gerth Decem.7、Mills to Saul Alinsky Decem 18) に、ドワイト・マクドナルドらとの交友を嬉々として語り、そして“politics of truth”という論考を書くことを吹聴している(Mills2000 p.56 p.60 p.62)。同名の論考は見あたらないが、『ポリティックス』誌に書かれた知識人論「無力な人びと――知識人の社会的役割」（Mills1943）がそれにあたる（Summers2007, p.13）。Gillam1975は、“politics of truth”という着想が『パワー・エリート』読解の鍵となることを論証している。Geary2009 は、“politics of truth”論が「真実＝ラディカル、ラディカル＝真実」という循環論法を用いていることなど、理論的な識見を欠いた不備のある表現であることを確認する。その上で、書簡における語用、「無力な人々」「知識と権力」などの批評的な論考を検討し、“politics of truth”論の再帰性を吟味し、ミルズの知見を再構成する。そして、『パワー・エリート』、『社会学的想像力』の解釈を行った。最後は、「未刊の次著」『文化装置』にまで論じ至っている。Summers2008は、“politics of truth”を鍵語として、最初期から晩年に至るミルズの未発表論文集を編纂した（Summers ed.2008）。

「少し前までは、ジョン・デューイを読んで明らかに満足していた多くの人たちが、今では、ゼーレン・キェルケゴールのような人間的悲劇の分析家に、生々しい興味を抱くようになった。人間の運命を制御すべき人間の知性の力に対するプラグマティズムの強調を回復させようとしても、もはやアメリカの知識人はそんなことには心をとめなくなっている。彼らは明らかに新しい苦悩に駆り立てられ、そして新しい神を求めている」（Mills1944→1963, p.292＝1972, p.237）。

ミルズは、不安に苛まれる知識人のありようを批判している。新しい神とは、あるいは多元的な決定を行うアメリカ社会という展望であり、あるいは豊かな消費であり、あるいは価値中立的な純粋科学である。ミルズは、後に『ホワイトカラー』で描くことになる中流階級の増大という議論、『パワーエリート』で描くことになる意思決定の集中といった議論を先取り的にラフスケッチしている。不安要因の軽減、理想の修復に躍起になっている。結果として、草の根民主主義的な経路と、国家の意思決定とが分断されている、とミルズは批判している。

ここで、価値中立的な純粋科学という言説の商業的売買、政治的利用を、ミルズが批判していることにも注意しておこう。ミルズは、科学的探求において、距離化が重要であることを認めつつ、「それを政治的物神に作り上げる理由は何もない。ましてやそれが政治的な口実として役立つことにはなるまい」（Mills1944→1963, p.301＝1972, p.244）と言っている。ミルズが問題にしているのは、アメリカの夢、可能性、希望を主張する純粋科学の言説が、政治的に影響力を持ち、そして販売されていることである。ミルズは、言説の社会的機能、言説の作品モチーフを批判的に省察、解析する必要を主張している。[20] こうしたミルズの批判は、『社会学的想像力』における社会学批判の核心的論点を先取りするかたちになっている。

ミルズは、「公衆を探しもとめる知識人」（Mills1944→1963, p.295＝1972, p.240）にも言及している。フリーランサーという知識人の自由も、「「情報産業」の雇われ人」（Mills1944→1963, p.296＝1972, p.237）となり、市場に出ることで矮小化される。「市場に出なければ、自由は公的な価値を持たない」からである。「知識人とその潜在的公衆との間には、他の人びとによって所有され操作される技術的、経済的、社会的構造が横たわっている」（Mills1944→1963, p.296＝1972, p.237）。

ジャコビーの言う地位と給料を追い求める知識人、という知識人の制度化論とはまた別の、ヴェブレンのセールスマンシップ論を彷彿とさせるような筆致で、ミルズは知識人批判を行っている。[21] ミルズが批判の根拠にしているのは、後に「知的職人性」（intellectual craftsmanship）として論じることになる生き方である。[22] この論文でも、「職人的生き方」（craftsmanship）という文言は用いられている。ミルズは次のように言っている。

「T・ペインのような人は、通俗的なことを口にしないので、広告に支えられた大量配布の世界のなかで、読者への直接的経路が遮断されてしまう。しかし、パンフレット界は、そうした経路を提供する。あらゆる知的、技術的満足にとって中心となる職人的な生き方は、雇われ知識人（intellctual worker）の増加のために阻害されている。かれらは、ハリウッドの作家と同じ境遇にいる自分を見いだす。つまり、彼らがその作品のなかに注ぎ込んでいた独立的な職人的生き方は、大衆的市場に対する大衆的アピールという目的に、従属している」（Mills1944→1963, p.296＝1972, p.237）。

---

[20] ミルズは次のように言う。「権威を支え、多くの社会科学者にとっては幻想だとわかっている、多くの幻想がある。だが社会科学者は、それに抗して真実を公言するよりはむしろ、暗黙裏に協力関係や沈黙によって、あるいは公然と仕事の名において、しばしばそれを是認する。かれらは、純粋科学の名において、無難な課題を慎重に選択することによって自分自身を検閲するか、あるいはかれらの学識んじゃどの威信を売ることによって、自分自身の目的以外の目的に使えるのである」（Mills1944→1963, p.302＝1972, p.244）。「大実業家は、かれらの安ぴかものを、いかに広汎に配分するかを正確に語ることなしに、公衆の面前にみせびらかすことによって、技術的な罠を仕掛ける。同様にして、政治関係の文筆家も、注意の焦点を、現在からそらし、いくつかの将来のモデルに向ける。現実的な現在の敵対関係が経験されればされるほど、将来が擬似的調和や総合的士気の源泉として招き寄せられる」（Mills1944→1963, p.295＝1972, p.244-245）。

[21] 「地位恐慌」という概念を用いるようになるのは、50年代に入ってからのことである。

[22] このタイトルの論文をミルズが最初に書くのは1952年である（Summers2008, p.43）。

ミルズは、一人の職人的なフリーランサー、公共知識人として、[23]アメリカの夢や希望が語られる社会的基盤への注意を喚起した。そして、現状に漠然とした不安を感じ、現状肯定的な言説に「満足」できずに、「悲劇的」な言説を求めたりもする、公衆に向かって語り続けた。

4.2. 政治的公衆と大衆的公衆

次に、ミルズの公衆概念について検討しよう。ここでは、「無力な人びと」の5年後に書かれた『新しい権力者』（Mills＆Schneider1948＝1975）の政治的公衆論を紹介する。ミルズは、このあとも『性格と社会構造』、『パワーエリート』他の論考でも、公衆論を展開している。そうした公衆論の核心部分が、40年代にすでにあらわれていて、かつその骨子がより明確に表現されていることを、論じることが、このテキストを検討する目的である。[24] エルドリッジは、この政治的公衆論を、「洗練と発展の余地があるのは確かだが、おそらくミルズの著作のなかでの公衆についてのもっとも実りある議論である」（Eldridge 1983:71）と評価している。議論は、すでに別の場所（伊奈・中村2007）で述べたことであり、行論は中村の修士論文（中村1999）をもとにして、報告者が加筆・要約したものである。繰り返しになるが、重要な議論であるので、さらに報告者なりに抜粋、要約して述べてゆく。

さて、同書でミルズは、「政治的公衆」（political publics）と「大衆的公衆」（mass public）という区別を使っている。二つの公衆概念は公衆の存在を前提にし、政治的存在であったものが、変化し否定的な存在になりつつあるという変化を、表現している。ミルズは、公衆は公衆としてあって、それが本来的な公衆から、過渡的な段階に入り、大衆化しつつあるという理論構成をしている。

ここで議論のポイントは、この時代のミルズが、まだ公衆――具体的には労働者――に若干の希望をもっていたということではない。公衆という政治主体は――それがマルクスの言う労働者であっても――特定の時代や社会を超えて、過度に一般化して決めることはできない、というのがミルズの考え方である。ミルズが重視したのは、大衆化という変動のなかにある社会、マスメディアが発達して人間に大きな可能性と危機がもたらされている時代といった「今／ここ」における公衆の主体的、構造的条件を問うことである。「政治的公衆」の概念は、「今／ここ」という特殊な条件のもとにおかれた主体の条件について、問いかけるものであった。

二つの類型について、若干紹介しておこう。

大衆的公衆は、安定した考え抜いた政治的見解をもっておらず、漠然とした道徳的判断をとる可能性の方が大きい。大衆的公衆は、多くの条件によって影響を受ける。たとえば、大衆的公衆の労働組合指導者についてのイメージは、政治的公衆の発言から、あるいはマスメディアから、あるいは労働組合についての本人の直接の経験から、影響を受ける（Mills＆Schneider1948:31-32＝1975:30-31）。

政治的公衆は、政治問題について鋭く継続的な関心をもっている。かれらは原則や理念をもち、その観点から事件や政策について見解を述べる。また政治的公衆は、読んでいる出版物や支持組織によって位置づけることができる。それらの資料によると、アメリカにおける政治的公衆は少数である。ミルズは、アメリカの政治的公衆として、極左、独立左翼、自由主義的中道派、共産主義者、実際的右翼、洗練された保守、の6種類を分類している（Mills＆Schneider1948:14-26=1975:13-26）。[25]

『新しい権力者』における政治的公衆の分析は、当時のイデオロギー状況を、ミルズらしい筆致で、生き生きと描いている。これは、アメリカ社会のイデオロギー分析、政治分析に対するひとつの貢献であると言える。その後のミルズは、『新しい権力者』の政治的公衆についての細かな議論を全面的には展開していない。しかし、一つ一つの部分から再構成すれば、ミルズが1950年代に行ったアメリカ社会のイデオロギー分析は、基本的には1940年代に書かれた『新しい権力者』の政治的公衆論を踏襲する形に落ち着く。[26]

---

23 ミルズは、ホワイトカラーとしての自己については応分の省察している。

24 それ以降の公衆論との比較については、伊奈・中村2007の10章を参照。

25 公衆の6種類については、伊奈・中村2007, p.244-245を参照。

26 この政治的公衆論を前提にして、「左翼の退潮」と、「自由主義的レトリック」と、「保守的ムード」といったミルズの分析が成立している。おのおのについて説明しよう。第一に、「左翼の退潮」から。ミルズは、旧左翼の政治哲学について、「労働形而上学」である、と批判するようになる。端的に言えば、古典的マルクス主義の政治哲学を、歴史的・社会的特殊性を無視して適用することである。結果として、社会変革の担い手としては労働者しか考えることが

ところで、『新しい権力者』の政治的公衆論と、それ以後の展開であるイデオロギー分析では、後者のほうがよりレトリカルで批判的になっているように見えることはたしかである。

『新しい権力者』以後のイデオロギー分析は、しばしば「形而上学」――具体的問題から遊離した、過度の一般化――に対する批判となっている。ミルズが「形而上学」という用語を使う場合、それは問題解決に向けた理性的な討論を経ていないという否定的な意味合いである。「形而上学」は、過度の一般化により、形而上の特定の観念や体系や方法や操作へと問題を解消してしまう。[27]

ミルズの政治的公衆論は、だんだんとこうした「形而上学」に対する批判としての意味を強めていき、他方で、大衆化に対する批判は鋭くなってゆくように見える。「政治的公衆」を分析してみせた『新しい権力者』の時のミルズから、大衆社会において政治哲学の担い手やイデオロギーの向かうべき公衆を見つけることができないミルズへの政治的希望の変化を表しているという解釈も一定可能であろう。しかし、ミルズの議論は、主体としての公衆についての議論から、その背景としての社会構造の歴史的ありようへと力点を移していったという解釈も可能である。

40 年代から 50 年代初頭の「政治的公衆の変容」に着目する議論は、社会構造の変化を踏まえた「政治的公衆」の条件を問い直しである。新しい条件を踏まえた公衆の再構成という課題が明示された。そして、50 年代中盤以降の公衆と大衆の二分法は、社会構造のありようを考察し、歴史的な変化＝大衆化を指摘した。物議をかもし、論争を巻き起こしたという点で、言説の多元化のための一元論の叩きつけとしては成功した。

公衆の概念規定は変化しているものの、ミルズには公衆のための社会学というモチーフが一貫してあった。「公衆的なもの」と「大衆的なもの」の両極の「あいだ」に「今／ここ」の具体的な歴史的現実を浮かび上がらせようとしたことに変わりはない。「公衆的なもの」の変容＝大衆化を考察する場合と、大衆化の社会的現実と公衆の構造的条件を考察する場合では、概念定義が異なっているという解釈も可能である。いずれにしてもミルズの探求は、「政治的公衆」の社会的条件を問うものであったと言える。さて、以上中村好孝との共著書をもとに、ミルズの公衆論について整理した。繰り返

できなくなる。担い手としての労働者が、特定の歴史や社会から切り離されて、過度に一般化される。ミルズは言う。新しい社会構造の変化、主体的条件の変化を踏まえず、政治主体は労働者以外にあり得ないと主張するのは、現実から遊離した形而上学である。こうした労働形而上学は、理性的に未来を形成するという自由の役には立たない、と。

アメリカ政治の公分母である「自由主義レトリック」も、ミルズのイデオロギー分析の主要な対象である。かつての自由主義は、社会理論と理想と担い手が一体となった政治哲学・イデオロギーであったが、現代アメリカ社会においては、自由主義が掲げる理想と説明しなければならない現実が分離してしまい、自由主義は「社会的現実をケチくさくぶざまにおおいかくす方法」（Mills1959:167=1965:220）となっている。つまりは、一時期のアメリカ社会においてのみ根拠を持っていた思想が、過度に一般化されている。いかに進歩や改革をうたおうとも、それはもはや行動の選択肢を狭隘に制限する形而上学に他ならない。

それら全体をおおうのが、現代アメリカ社会の「保守的ムード」である。それによると、扇動的な右翼政治家が大衆の感受性の調子を決定しており、洗練された保守は討論を経ることなく既存の権力を静かに行使しており、1930 年代の公的な理想であった自由主義は、多様な政治的公衆に使われるたんなるレトリックとなり、ラディカリズムは萎縮している（Mills1956:338＝1969:下 262）。ミルズによれば、アメリカは、保守的イデオロギーをもたない保守的な国なのである。「現代の権力は強制でも権威でもなく操縦という形態をとっている」というミルズの中心命題の一つは、このようなことを意味している。

27 「形而上学」をミルズが批判している議論の例としては、左翼の退潮を示す「労働形而上学」のほかに、「軍事形而上学」がある。ちなみに、言葉だけなら「経済形而上学」（Mills1956:86＝1969:上 138）という使用例がある。

「軍事形而上学」は、「つねに新しく、つねにより大きな軍事的危険をため込むことによって、平和の条件を作ることができるという――たしかに誠実かつ善意でもたれている――ドグマティックな見方」（Mills1958→1960:60=1959:65）であり、「国際的現実を基本的に軍事的なものとして定義する精神の鋳型」（Mills1956:222=1969:下 77）である。もちろん、この軍事形而上学はそれだけで突然生まれたものではないが、いったん生まれて流通すると、この「気の狂った現実主義」（Mills1958→1960:93-94=1959:114）が人間の行為を生むことになる。これも「労働形而上学」と同様、理性ある合理性の対極にある観念である。

しになるが、政治的公衆論、公衆のための社会学をめぐる理論構成は、共著者中村好孝の貢献であることを再度確認しておく。

5. ミルズにおける職人性と合理化――ウェーバーとヴェブレン

［論旨］：次に第２の問題について検討する。ミルズの批評的な「線引き」、言説の作品性は、職人性論という理念、合理化＝物象化の洞察、禁欲倫理をめぐる方法等に見てとることができる。

さて次に、ポピュラー文化や消費文化に対するミルズの論及について考えよう。ミルズは、ジャコビーの言う文化や知の制度化、商業化、公論のマスメディア化などを激しく批判している。しかし、ミルズは、文化がハイブラウであるかどうか、という「線引き」をしているわけではない。それでいて、現代文化や知の逆説などを深く洞察するような批評を展開している。そこにミルズの社会批評の最大の特徴があると言っても過言ではない。

5.1. 職人性と商業文化

ミルズがこうした問題について議論する際に用いたのは、冷徹な合理化の進展を見据えるM.ウェーバーの知見であり、産業化の歪みを批判するヴェブレンの知見であった。H.H.ガースは、ミルズが「ヴェブレンとウェーバーを好んで重ね合わせようとした」と語っている(Gerth 1962)。

ミルズは、欲望の生産と消費を批判するヴェブレンの知見を継承している。ミルズは、文化を商業化し、無軌道に増殖させる社会を、ヴェブレンの「見せびらかしの消費」概念などを用いて、批判している。20 世紀のアメリカ社会は、疲弊・退嬰したヨーロッパとは異なる「例外性」（リプセット）をもった存在を自負し、新たな進歩や「アメリカンドリーム」が語られるようになった。[28] 「アメリカンドリーム」という議論の根拠となった「画期的処方箋」は、――教科書的に単純化すれば、――政策ルート、市場ルートからの需要創出、それに伴う消費社会の出現、「チャンス」をモチーフとした勤勉の倫理などである。そして、工業化の進展を根拠として、病理や周縁を動員する社会という新しい社会モデルが提起された。ヴェブレンとミルズは、こうした処方箋によって、無軌道で不安定な消費の増殖につながり恐慌のリスクが高まるのみならず、最終需要としての戦争が手段化される危険に警鐘を鳴らした。

しかし、ミルズは、消費される文化の内実、その作り手を全否定するわけではない。たとえば、モードやファッションという 20 世紀の消費文化の中核的な産業の担い手であるデザイナーについて、ミルズは論文を書いている。ミルズは、商業主義の文化、マスメディアによる娯楽とうさ晴らしの奨励、愚かなデザインの生産と消費の悪循環、規範と価値の崩壊によるシニシズムとポピュリズムなどを批判している。

---

[28] H.アーレントは次のように言っている。「豊かさと際限のない消費は貧民の理想だからである。それは貧困の砂漠に浮かんだ蜃気楼である。この意味で、豊かさと貧困は同じ硬貨の両面にすぎない。・・・自由と贅沢はこれまでずっと両立しないものと考えられている。そして、近代的な評価に立てば、アメリカ建国の父たちが質素と「生活態度の素朴さ」（ジェファーソン）を固執したのは、現世の楽しみに対するピューリタン的な侮辱であると非難できるかもしれないが、このような非難は偏見からの自由を示すものではなく、むしろ自由を理解できない無能力を証拠だてているのである。というのは、あの「突然の富を求めようとする宿命的情熱」は、けっして感じやすい人の悪徳ではなく、貧民の夢なのだから。・・・アメリカの夢はアメリカ革命の夢――自由の創設――でもなければ、フランス革命の夢――人間の解放――でもなかった。不幸にして、それはミルクと密の流れる「約束の地」の夢であった。そして、近代テクノロジーの発展によって、もっとも広範な予想も越えて、この夢がこんなにも早く実現したという事実のために、夢見る人々が、自分たちは考えられる限り最良の世界に本当に住むことになったのだという確信を持ったのはまったく当然のことであった。･･･結論として、「the man が the citizen を打ち負かしてしまうだろうし、市民の政治的信条は消え去るであろう」というクレーヴクールの予言が正しかったことは否定できない。さらに「私の家族の幸福だけが、私の願望の唯一の目的である」と熱意をこめていう人びとがほとんど全ての人から拍手喝采を受けるだろうということも否定できない。」」（Arendt1963→1990, p.139 ＝1975, p.146-147）。

しかし他方で、ミルズは、職人性を理念として掲げている。そこでミルズの定義する職人性とは、第 1 に、もの作りに金銭的な動機が介在しないこと。第 2 に、もの作りの計画が他のしがらみに絡め取られたりすることがない自由な存在であること。第 3 に、仕事を通じて技芸を発達させられること。第 4 に、仕事と遊びが統一された存在であること。第 5 に、仕事を受けとめ評価する公衆をもつ存在であること。ミルズは、この 5 点から定義される職人性の概念を用いて、産業の論理転換（＝金作りからもの作りへ）、もの作りと娯楽の間の経路を修復について論じている。そして、職人と公衆との連携に可能性を見いだしている。(Mills 1958 → 1963, p.382-386 ＝1971, p.305-308)。

5.2. もの作りの動機と金作りの動機——合理化をめぐって

こうしたミルズの職人論、公衆論の背景には、単純に図式化すれば産業資本主義と金融資本主義の対比、ヴェブレンのことばでは産業の論理とビジネスの論理、製作本能とセールスマンシップの対比がある。別の角度から見ると、ここに——物象化論としての——ウェーバーの合理化論の影響を読解することも可能である。ミルズが明らかにしようとしたのは、冷徹な合理化の進展により、職人性や製作本能が駆逐され、ビジネスの論理が貫徹するプロセスである。

こうした問題意識は、最初期の知識社会学のなかにも読み取ることができるものである。ミルズは、テキサス時代に執筆した最初のアカデミックな公刊論文（Mills1939）で、語彙の体系に照準し、言語＝行為という観点から思考の座標軸をモデル化している。 ミルズのモデルは、思考を根拠づける潜在的次元＝規範構造としての文化に着目するところに特徴がある。論文のタイトルが「言語、論理、文化」となっている理由もここにある。[29]

ミルズは、リチャーズを参照しつつ、思考の語彙は社会的な目的のためにいくつかの要素を「隠す」機能を持っている、という仮説を提示している。そして、「隠す」こと＝曖昧化／顕在化＝区別ということばの力動から、社会、思考、文化の形成と変動を説明する。例としてミルズは、中国の伝統的な社会をあげる。年齢とそれに対する尊敬が密接不可分のものとして「曖昧語」で表現され、社会の基本的な価値づけを絶対化する傾向がある。逆に、高齢者への尊敬が薄れてくれば、加齢と尊敬の語彙は分析的に区別されるようになる。そうミルズは言っている（Mills1939→1963 p.436＝佐野勝隆訳 1971 p.342 ）。

こうした立論の決定的なきっかけとなっているのは、K.バークの次のような文章である。「物とうごきの名称は善し悪しの言外の意味をこっそり持ち込んでいる。名詞は一種の見えざる形容詞を伴いがちであり、動詞は見えざる副詞を伴いがちである（Mills1939→1963 p.437＝佐野勝隆訳 1971 p.343）」。ことばの力動の原基的構造を問うバークの批評理論は、ミルズの出発点から影響を与えていたということができる。

注目したいのは、ミルズが、ビジネス文化——ヴェブレンの言うビジネスの論理、セールスマンシップ、——の形成のなかで、曖昧語である「資本」が用いられるようになったことに言及していることである。すなわち、マネーゲームが自己目的化し、絶対化してゆくにしたがい、「資本」という語彙が汎用されるようになった。そうミルズは指摘している。このような指摘は、テキサス時代の恩師でありヴェブレンを継承する制度学派の一人とされる C.E.エアーズの所説に依拠している。こうした知見の上に、ミルズはウェーバーの合理化論、物象化論を吸収していったことになる。

ミルズの提起した語彙分析のモデルは、このように潜在するものを読みほどきながら、思考者の「論拠」（rationale）——割り切りの論理——を考察する（Mills1939→1963 p.434＝佐野勝隆訳 1971 p.341）。ミルズのこうした最初期の議論は、50 年代以降の公衆論、大衆社会批判、イデオロギー批判などで用いられた形而上学批判と重なるものである。すなわち、特定の「論拠」を曖昧化し、隠し、実体化、絶対化する形而上学をミルズは批判した。むしろ、初期の議論の展開として、こうした形而上学批判を読むことも可能だろう。

ここで、ガースとの共著『性格と社会構造』にも付言しておく。同書で展開されている社会構造モデルは、経済、政治、軍事、親族などの制度概念と、シンボル、教育、テクノロジーなどの局面(sphere)概念を両輪とするものである。明らかにウェーバーの影響下にあるモデルは、一方で、特定の制度領

[29] 執筆時期からウェーバー、マンハイムなどはテキサス時代から読んでいたことになる。

域が説明要因として実体化することを回避し、多元的に考察することを志向するものである。他方で、それは、局面概念の運用において、特定の「論拠」が自己目的化するメカニズムを考察することも目指している。多元化の一元化の考察、一元化の多元的考察、その逆説的構造の洞察にミルズの社会構造論のポイントがある。[30] そして構造的洞察を、事例的調査によって、公衆に根ざしたことばで語るところに、知的職人、公共知識人ミルズの真骨頂がある。

5.3. 禁欲の倫理をめぐって

前述の「言語、論理、文化」のモデルには、思考のモチーフ、モチーフの原基的構造への問いが胚胎されている。そしてミルズは、後に学問的なモチーフ、文化制作のモチーフ、日常的生のモチーフなどをシームレスに考察する「動機の語彙論」を提起するに至る。

ミルズは、動機の語彙論を体系化することは終生なかった。社会構造の体系も、不十分なまま放置された。[31]しかし、ミルズは、バルザックの人間喜劇の社会学バージョンを描くことを宣言している。[32]公衆に根ざしたことば、公衆に届くことばで語り続けた。パワーエリート、ホワイトカラー、社会学的想像力など、絶妙なコピーがベストセラーを生み出したことからもそれはわかる。[33]

ここでは、ウェーバーの合理化論においてもう一つ重要な議論である、禁欲的労働論について若干言及しておきたい。[34] ミルズが生きた時代のアメリカにおいて、この問題は、宗教倫理と禁欲労働という問題を、消費社会の展開の中で、どのように論じることができるのか、という問題となる。ミルズは、この問題をヴェブレンの見せびらかしの消費論などとも重ねながら、「地位恐慌」というレトリカルな用語を編み出し、考察を展開している。ベル『イデオロギーの終焉』は、この用語に 1 つの焦点をおいて、ミルズ批判をしていることは周知の通りである。

ミルズ社会学のスタイルが顕著に現れた論考として、「労働と余暇の統一」(Mills1953)を見てみよう。そこでミルズは、同時に三つのことをする男[35]について、――ノーマン・メイラーばりの詳細さで――描写している。

その男は、片方の耳と目でテレビの野球観戦をし、もう片方の耳でラジオの音楽番組を聴き、もう一つの目と両手を使って雑誌をめくっている人である。食生活は不安定で、通勤に往復 1 時間、取るに足らない複雑な仕事を淡々とこなし疲れ気味である。休日は、様々な消費財を購入、使用するのに四苦八苦している。ミルズはこの男を詳しく描写したあとに、それを「労働と余暇の統一」の例として、話にオチをつけている。そして、余暇が生活の目的になり、余暇倫理が、仕事の価値を含めてあらゆる価値を飲み込んでいる、とミルズは分析を行っている。そしてさらに、「真の自己開発が――純粋な芸術と同様に――アメリカ的日常生活の主要な型から孤立してゆく傾向にある」(Mills 1953 → 1963, p.349 ＝1971, p.379)。

こうしたミルズの労働倫理の分析は、プロテスタントの禁欲倫理を 20 世紀アメリカ的な文脈のなかで体系的、理論的に再構成しようとしたパーソンズやベラーとは異なる。また、アメリカ社会の現状を見据えて、消費文化を「ハイブラウ」な視点から批判し、消費の矛盾を洞察しつつも、新しい消費の倫理を論定しようとしたベルとも異なるスタイルで、描出を行っている。[36]こうした様々な要素の

---

30 こうした制度的領域や局面に関する議論は、千石2001におけるウェーバー解釈、清水2011におけるトライユニティ論などとからんで一つの争点を形成するだろう。

31 その理由が、批評理論の先駆としてのバークとは一線を画し、ニューヨーク知識人たちと同じスタイルでものを描くためであったかどうかはわからない。一つの論証課題であろう。

32 Mills2000には、W.ミラー夫妻宛の手紙で２回、R.ミリバンド宛の手紙で１回の言及があることがわかる（Mills2000, p.364の索引参照）。とりわけミリバンドへの手紙では、ルカーチのリアリズム論への言及もある。これについては、伊奈1991 p.87,f.、p.102、p.214等を参照。

33 ミルズは、40年代中葉のD.マクドナルド宛の手紙で詩人・映画の批評家J.エイジーについて論じ、「社会学的詩」の重要性を主張した。1948年にこの手紙は雑誌『ポリティックス』に掲載される(Summers ed 2008 p.33-35)。エイジーとミルズの関係についてはSummers2007を参照。

34清水 2011 も言うように、アメリカ社会学においては、一方でパーソンズのように、そのアメリカ的再生を論ずる者がいる。他方で、ボボスのような消費スタイル論に着目するベルのような論者がいる。

35 この論文の重要性も、中村好孝から学んだことである。

36 パーソンズ、ベラー、ベルについては、清水2011 第八章から学んだ。

アンバランスの描出を、社会学的な人間喜劇として重ねることが、ミルズの社会学独特な作品性、批評性であった。

6. おわりに

以上、ミルズの公共知識人論について、ジャコビーの見えない知識人論、知識人の制度化論[37]との対比で整理してきた。最後に、社会学史の教科書風の議論と照らし合わせ、図式的に整理しておきたい。

１９世紀のヨーロッパではいわゆる「市民社会的なもの」、その啓蒙主義に対する批判と克服が模索された。時間の変化を単純化して概括すれば、「健康から病へ」「市民社会から大衆社会へ」「公衆から群衆へ」「健康から退廃へ」「中心から周縁へ」というような図式で捉えられる。そして、公衆や、健康や、正常、衛生、中心、あるいは男性といった、括弧つきの「正常なもの」との対比で、群衆や、病いや、狂気や、退廃や、周縁、性的なもの、あるいは女性といった、精神や社会の病理、「病い」が発見、ないし対象化されていった。こうした両義的なものの不安定であやうい均衡（＝ゆらぎ、同一性の「危機」）が、ヨーロッパの 19 世紀的文化表象に特徴的なことである。

ヨーロッパの社会科学は、工業化の「光と影」、混沌とした社会のゆらぎと対峙しながら、社会構成の論理を探求した。[38]そして、社会主義、保守主義、ファシズム、そしてケインズ主義などの選択肢が示された。こうしたヨーロッパの閉塞状況と向かい合いながら、アメリカの社会科学は、自国の「例外性」を自負した。「理由の空間の現象学」で知られる哲学者門脇俊介は次のように言っている。

「ハイデガーが後期の著作で西洋の陰鬱なる歴史的宿命とみなしたもの、つまりテクノロジー（技術）を、デューイは、人間を「脅かす条件や力を逆用して保塁」を気づくための方法として理解する。ハイデガーにとっては「最高度の危険」であったもの、テクノロジーが、デューイにとっては世界がより安全にされるための方策にほかならないのだ。

･･･テクノロジーについてハイデガーの概念とプラグマティズムについてのデューイの概念とが共有している発想がある。すなわちテクノロジーは、何かのための単なる手段なのではなく、むしろ、あらゆるものが「何か別のものを促進することへ向けられた何かである」と定義される方式である」（門脇 2007, p.217-218）。

極言すれば、アメリカの社会科学は「何か別のもの」への変換というモチーフ、そしてそれを通じた合理的制度化による終焉の動員と合理化の徹底というモチーフと対峙していたと言えるのではないか。[39]そして、アメリカの公共知識人とは、こうしたモチーフと批判的に対峙し、公衆に向かって批評を提示する存在と仮定することはできないか。とすれば、公共知識人は自己と社会の逆説的関係と対峙する存在、独自の批評的作品性を同定する存在と定義できるように思う。分析的リアリズムとメディア論に向かうことになるパーソンズも、清水晋作の言うトライユニティ論に向かうことになるベルも、そして知識社会学的視点を貫いたミルズも、そうした公共知識人の一人ということができるように思う。

そのなかで、ミルズ社会学は、洞察に満ちた人間喜劇を描いた点に特徴がある。また、知識社会学的な動機づけの社会学は、様々な理論的なポテンシャルをたたえているように思う。「マルクスそのアメリカ的可能性の中心」がベル、「ウェーバーそのアメリカ的可能性の中心」がパーソンズとすると、ミルズは誰の可能性の中心を探求したのか。あるいは中心ではなく周縁なのか。

文献：

Agger,B., 2000, *Public Sociology,* Rowman & Littlefield.
秋元秀紀, 2001, 『ニューヨーク知識人の源流―1930年代の政治と文学』彩流社。

37 付言すれば、矢澤修次郎はオバーシャルの制度化論などをリファーしながら、社会学史の通史を描いている。

38 清水幾太郎の反映から構成へ（『現代思想Ⅱ』岩波全書）という図式とも照らすことができるだろう。

39 バーコフ、サムエルソンと関わらせてパーソンズを解釈する小室直樹と、それとは一線を画す富永健一とどちらの解釈を指示するというような問題ではなく、あくまでも底流にある一つの方向性である。

Arendt, H., 1963→1990, On Revolution, Penguin Books.(=1975 志水速雄訳 『革命について』みすず書房）。
Aronowitz, A.ed. ,2004 , *C. Wright Mills, I-III*, Sage.
馬場修一, 1972, 「現代知識人論の課題」『思想』no.575。
Bell, D., 1980, "The 'Intelligentsia' in American Society", *Sociological Journeys:Essays 1960-1980*, Heinemann.
Brooks, V.W., 1915, *America's Coming of Age*, B.W.Huebsch
Burke,K., 1935, *Permanence and Change*, New Republic→1954,University of California Press.
———, 1941b, *A Grammer of Motives*, University of California Press.
（＝1982, 森常治訳,『動機の文法』、晶文社。）
——— (Gusfield,J.R.ed.), 1989, *On Symbols and Society,* University of California Press（＝1994 森常治訳,『シンボルと社会』法政大学出版局。）
Clawson,D., Zussman,R., Misra,J., Gerstel,N., Stokes, R., Anderton,D.L.Burawoy,M. eds., 2007, *Public Sociology: Fifteen Eminent Sociologists debate politics & the Profassion in the Twenty-First Century,* University of California Press.
Eldridge, John. , 1983, *C.Wright Mills,* Tavistock Publications
遠藤薫編, 2007,『グローバル化と社会変容』世界思想社
福田恒存, 2004, 『福田恒存文芸論集（講談社文芸文庫)』講談社
船津衛, 1976, 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。
Geary, D.,2009, *Radical Ambition: C.Wright Mills, the Left,and American Social Thought,* University of California Press.
Gerth,H.H., 1962, "C.wright Mills 1916-1962", *Studies on the Left* v.2, no.3.
Gerth, H .H. & C. W. Mills, 1953, *Character and Social Structure: The Psychology of Social Institutions,* Harcourt: Brace & World Inc.（＝1970, 古城利明・杉森創吉訳、『性格と社会構造—社会制度の心理学』青木書店。）
Gillam,R.,1966, *The Intellectual As Rebel:C. Wright Mills 1916-1946*, Unpublished M.A.essay Columbia University. → 2004 Aronowitz, ed.
————, 1975, "C.Wright Mills and Polics of Truth: *The Power Elite* Revised", American Quarterly → 2004 Aronowitz ed.
長谷川公一, 2004,「巻頭言 「公共社会学」と社会運動研究（特集 社会理論と社会運動)」『社会学研究』76)。
本間長世, 1996, 『思想としてのアメリカ——現代アメリカ社会・文化論』中央公論社。
堀邦維, 2000, 『ニューヨーク知識人——ユダヤ的知性とアメリカ文化』彩流社。
Horowitz, I.L., ed., 1964, *The New Sociology: Essays in Social Science and Social Theory in Honor of C. Wright Mills*, New York: Oxford University Press
————, 1983, *C.Wright Mills：An American Utopian*, Free Press.
Howe, I. ,1968, "The New York Intellectuals", *Commentary* 46.4.
伊奈正人, 1982, 「反省と想像力——C.W.ミルズと想像力の知識社会学」（修士論文）。
————, 1991, 『ミルズ大衆論の方法とスタイル』勁草書房。
————, 2006,「社会学的想像力再考」『地球情報社会と社会運動』ハーベスト社。
————,2010a,「動機の語彙論と知識社会学——動機付与論から「動機論の動機論」へ」『経済と社会』38 東京女子大学社会学会（所属機関により電子化公開）。
————,2010b 「動機の語彙」『社会学事典』丸善。
————,2010c 「社会学的想像力」『社会学事典』丸善
伊奈正人・中村好孝, 2007,『社会学的想像力のために——歴史的特殊性の観点から』世界思想社。

――――――――――, 2011a,「エリートと支配」井上俊・伊藤公雄編『政治・権力・公共性（社会学ベーシックス9）』世界思想社

――――――――――, 2011b, 「武器としての想像力」井上俊・伊藤公雄編『社会学的思考（社会学ベーシックス　別巻』世界思想社

Jacoby, R., 1987, *Last Intellectuals, American Culture in the Age of Academe*, Basic Books →2000 with new introduction by the Author.

Jones, R.P., 1977, *The Fixing of Social Belief: The Sociology of C. Wright Mills*, Ph.D. Dissertation of University of Missouri.

門脇俊介, 2007, 『現代哲学の戦略――反自然主義のもう一つの可能性』岩波書店。

Levine, L.W., 1988, *Highbrow/Lowbrow: The Emergence of Cultural Hierarchy in America*, Harvard University Press. （＝2005　常山菜穂子訳『ハイブラウ/ロウブラウ―アメリカにおける文化ヒエラルキーの出現』慶應義塾大学出版会）。

Macdonald, D., 1960, "Mascult and Midcult" *Partisan Review*, Spring →Macdonald1974（生井2005に部分訳）。→ *Masscult and Midcult: Essays Against the American Grain* (New York Review Books Classics)として、Summers J.他編で2011年10月公刊予定。

――――――――, 1974, *Discriminations-Essays & Afterthoughts 1938-1974*, Viking Press.

Mattson, K., 2002, *Intellectuals in Action*, The Pennsylvania University Press.

Melossi, D. ,1990, *The State of Social Control*, Polity.（=メロッシ 1992 竹谷俊一訳『社会的統制の国家』彩流社）

Mestrovic.S. & Kerr,K., 2010, *Postmodern Cowboy: C. Wright Mills and a New 21st- Century Sociology (Advancing the Sociological Imagination)* , Paradigm Pub.

Mills, C. W., 1939, "Language Logic and Culture" *American Sociological Review,* vol.IV、no. 5 （October）670-680→1963 Horowitz,I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Weight Mills*, Oxford University Press, 423-438. （＝1971, 佐野勝隆訳「言語、論理、文化」青井和夫・本間康平監訳『権力　・政治・民衆』みすず書房、334-344。）

――――, 1940a, "Methodological Consequences of the Sociology of Knowledge" *American Journal of Sociology,* vol.XLVI no.3（November）316-330→1963 Horowitz,I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Weight Mills*, Oxford University Press, 453-468. （＝1971, 田中義久訳「知識社会学の方法論的帰結」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、356-368。）

――――, 1940b, "Situated Actions and Vocabularies of Motive," *American Sociological Review,* vol.V (December):904-913 → 1963 Horowitz, I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 439-452. （＝1971, 石川晃弘訳「知識人の社会的役割」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、237-246。）

――――, 1943, "The Powerless People:The Role of Intellectual in Society," Politics, v.I, no.3 68-72→1945 American Association of University Professors Bulletin, v.31,no.2, 231-243 →1963 Horowitz, I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 292-304. （＝1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、344-55。）

――――, 1953, "The Unity of Work and Leisure", New York Herald Tribune, Oct. 25 →1963 Horowitz, I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 347-352. （＝1971, 石川晃弘訳「労働と余暇の統一」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、277-281。）

――――, 1956, The Power Elite, New York: Oxford University Press ＝1969 鵜飼信成・綿貫譲治訳『パワー・エリート　上・下』東京大学出版会

――――, 1957, "Comment on Criticism," *Dissent*, Winter here used in Domhoff, G. William and Hoyt B. Ballard eds., 1968, *C. Wright Mills and The Power Elite*, Beacon Press

————, 1958, “The Man in the Middle: The Designer” Industrial Design, Nov. →1963 Horowitz, I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press,374-386.（＝1971, 矢澤澄子訳「中間に位置する人：デザイナー」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、237-246。）

————, 1959c, The Sociological Imagination, New York: Oxford University Press ＝1965 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店

————, 2000. *C. Wright Mills: Letters and Autobiographical Writings*, University of California Press.

生井英考, 2005, 「知識人の大衆文化批判——ドワイト・マクドナルド「マスカルトとミッドカルト」有賀夏紀・能登路雅子『アメリカの世紀 1920年代－1950年代<史料で読むアメリカ文化史4>』東京大学出版会

中村好孝, 1999, 「C・W・ミルズの公衆のための社会学」一橋大学大学院社会学研究科修士論文。,

Oakes,G. & Vidich,A.J., 1999, *Collaboration, Reputation and Ethics in American Academic Life: Hans H.Gerth and C.Wright Mills*, University of Illinois Press.

尾上正人, 2001,「「ハイ・ブラウ」 自省的ミドル・クラス: 1930年代英国の知識人群像から」『奈良大学紀要』29号。

————, 2003,「解釈自由と新結合:「ミドル・クラス」の語り口」『社会学評論』 54(3)。

Poirier, R., 1967, “Learning from the Beatles”, *Partisan Review,* 34.4.

Rahv, P., 1940, “The Cult of Experience in America”, *Partisan Review*, 7.6.

桜井哲夫, 1983,『知識人の運命』三一書房。

Scott, M. B. & Lyman S.M., 1968, “Accounts,” *American Sociological Review*, 33 (1)：46-62.

盛山和夫, 2006, 「理論社会学としての公共社会学にむけて (<特集> 理論形成はいかにして可能か)」『社会学評論』57(1)。

千石好郎, 2001, 『「近代」との対決（増補改訂版）』法律文化社。

清水晋作, 2011, 『公共知識人ダニエルベル——新保守主義とアメリカ社会学』勁草書房

Summers, J.H., 2007, “James Agee and C. Wright Mills:Sociological Poetry” Lofaro, M.A. ed. *Agee Agonistes: Essays on the Life, Legend, and Works fo James Agee*, University of Tennessee Press.

————————, 2008, *Every Fury on Earth*, The Davies Group Publishers.

Summers, J.H. ed., 2008, *Politics of Truth: Selected Writings of C. Wright Mills,* Oxford University Press.

瀧川裕貴 ,2007, 「公共社会学論争の検討——社会学的規範理論の定立に向けて」『ソシオロゴス』3。

Taylor, W.R., 1992, *In Pursuit of Gotham*, Oxford University Press.

Trevino, A. J., 2011, *The Social Thought of C. Wright Mills (Social Thinkers),* Pine Forge Press.

上野千鶴子, 2000, 『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新聞社。

矢澤修次郎, 1996, 『アメリカ知識人の思想』東京大学出版会。